

全国女性建築士連絡協議会第30回開催記念誌・寄稿文

**全国的視野で、モノを考え、捉えられるようになり、
男性とは、「ずれた価値観」で、物事を進める知恵を得て、
建築という仕事とともに、素晴らしい人生を歩めている。**

日本建築士会連合会 女性委員会初代委員長（1988-1995）
一般社団法人 東京建築士会 村上 美奈子



2020 園 POWER クロストーク 於

「建築士は男女平等の国家資格であるのになぜ女性だけが集まるのか？」という疑問が投げかけられ、組織を作る際の抵抗は大きかったことを思い出します。しかし、30年もこの組織は続いており、かつ参加者が当初よりもずっと多いということを見ると、それぞれの個人が有効な組織と感じ、単位士会でも連合会でも必要な組織であったといえます。

女性への差別解消のみが主たる目的ではなく、女性の発想で建築やまちづくりに発言していくことで、結果としては、「建築士の活動に幅を持たせ、地位の向上につなげることができる」ということを、私は、『ずれた価値観』などと説明していました。ずれていることで、立体メガネのように建築活動に膨らみができるかと解説していました。男性と異なった活動として、協議会の意見を国交省や、厚生省、労働省に直接持参しました。「全国的視野から見た高齢化社会バリアフリーマニュアル」が最初でした。国交省ではとても感謝され、その後の施策展開において、全国統一的推進に加えて、地域性が加味されるようになったことに少なからず影響があったと思います。

私に関わった期間は、組織を作る準備期間を入れると、長期にわたる活動でした。その間いろいろなことを学びましたが、全国的視野で、モノが考えられるようになったことが何よりも身についた大きな財産です。東京から出て、地域を訪れてその土地の考え方、価値観が、東京や国の立場からは、まったく逆の効果であったりすることも実感として学ぶことができました。

また、訪れた場所では、会員の皆さんにあたたかく迎えていただきました。皆さんにお礼や感謝を伝えきれなかったのが心残りですが、歓迎いただいたことは、今も心に残っています。その後の委員長も同じ思いを感じたことと推察します。そうしたふれあいが、この組織の底に深く流れており、強い絆のもとになっていると思います。

現役で地域計画の仕事ができ、園 POWER で、子どもたちの成育環境づくりの活動ができているのは、これまでのつながりや、学びの機会をいただいたことが、私を大きく育て、財産となっているからだと思います。社会的にみて、建築士の立場は、よくなったか、悪くなったか、その両面があると思います。が、女性の建築士の働きやすさや、立場は、当初とは格段の向上が見られます。新たな課題もみられますが、更に皆で頑張りましょう。

全国女性建築士連絡協議会第30回開催記念誌・寄稿文

これからの全建女は、もっと大事になる！

日本建築士会連合会 女性委員会 4代目委員長（2004-2007）
一般社団法人 東京建築士会・一般社団法人 埼玉建築士会 宮本 伸子



30回目の全国女性建築士連絡協議会の開催、おめでとうございます。

お久しぶりだけでなく、初めましての方も多くなってきたかと思えます。

連合会の4代目の女性委員長を務めさせていただいた宮本伸子です。現在の本間委員長は8代目です。私が2代目の鍵野洋子（兵庫県建築士会）委員長の時に委員会に参加したときは、実は47都道府県の建築士会の全てに女性委員会・部会がやっとできたところでした。

そして私が委員長だった2005年に例の「姉齒事件」が起きました。事件が発覚したのが11月で、その年香川県で開いた全建女が珍しく12月2～3日というスケジュールだったので、マスコミへの対応もしなければいけなかったというのも懐かしい思い出です。

また、この頃には「女性委員会と青年委員会を合体しても良いのではないか（連合会でも単位士会でも）」という意見や、「全建女を毎年開催する必要があるのか」という意見などが議論された時期でもありました。女性委員長・部会長会議での結論は、全建女は大いに意義あり、継続。一方で女性だけでなく建築士会全体に幅広く参加を広げる方向に。

現在までの継続の成果を、各年度に取り上げているテーマや分科会の内容等で振り返ると、女性の建築への参加、高齢者問題・バリアフリー・ユニバーサルデザイン、シックハウス・建築環境問題、建築と素材、エネルギー・エコロジー、歴史的建造物の保全と活用、子供と建築、住まい方・共同居住、自然災害と被災地の復興、まちづくり等々。どれも、まだまだこれからも議論することがある、古くて新しいテーマなのではないかと思えます。

そう考えると、全建女の継続を主張したのは正しかったし、これからの全建女は、建築士会の中で、社会の中で、もっともっと大事な存在になると確信しています。今日現在の社会環境で言えば、以前とは違った意味で、レインボーカラーの、誰もが平等に参加し議論できる新しい全建女（全建LGBTs）に変化していくのかもしれない。それを担っていく各都道府県の全建女関係の皆様にエールを送ります。

残念ながら第2代の鍵野委員長、第3代の小谷部委員長が鬼籍に入ってしまったのですが、多分お二人も私に賛成してくださるのではないかと、この原稿を書きながら感じている次第です。

全国女性建築士連絡協議会第30回開催記念誌・寄稿文
東日本大震災から10年、コロナ禍の中で考える

日本建築士会連合会 女性委員会 5代目委員長（2008-2011）
一般社団法人 東京建築士会 定行 まり子
（日本女子大学家政学部住居学科）



全国女性建築士会連絡協議会の第30回大会開催、おめでとうございます。故小谷部育子元委員長の思い出と共に30回の記念大会をお祝いしたいと思います。

教育・研究者であり、建築士の実務に携わっていない私が、建築士会の会員になり、全建女委員長を務めさせていただいたのも小谷部先生のご指導によります。長野大会に小谷部先生と一緒に、小布施のエクスカッションに参加したことが懐かしく思い出されます。

1. 東日本大震災からの10年

2011年3月11日、田町の建築会館での会議中に地震が発生しました。会議は解散となり、歩いて池袋の自宅に着いたのは夜半を過ぎていました。学生の安否を確認し、被災地の女性建築士の皆さんに連絡を取りました。これをきっかけに現在は福島を中心に、学生を交えた様々な活動を続けています。皆さんのご協力を得て、「事実を確認し、人々と共有し、対策を考える」姿勢は、学生にもよき学びの場になっています。

地震があった3月には、京都の皆さんが、7月に予定していた全建女の京都大会を是非実施したいとの熱意を持って、東京まで相談に来られました。当時の東京は計画停電で薄暗く、活気を失っており、連合会の大阪大会は早々に中止が決定されていたのですが、京都の皆さんの前向きな姿勢に背中を押され、知恵を絞り、皆さんのご努力により、開催を冬に延期し実施にこぎ着けました。この京都大会は、被災地東北からも多くの参加者を迎え、京都の伝統、そして災害について語り合う、良い機会となりました。

2. コロナ禍、最近の状況

新型コロナウイルスの感染拡大により、建築士の皆様も、仕事のあり方が大きく変化してきていることと推察します。大学では、オンライン授業が中心となり、学生たちとリアルに会えない状況が続きましたが、今年度から設計演習を対面に戻しています。

日本家政学会より、この4月に『住まいの百科事典』（丸善出版）を刊行いたしました。15章303項目から成り、新たな住まい・住まい方を考える事典であると自負しています。特に、生活者の視点から考察・分析したことに特色があるのです。最後にお願いで恐縮ですが、学生たちとwithコロナの住まいのチェックリストを作成しました。ご協力いただける方がいらっしゃいましたら、QRコードからご回答頂けると幸いです。集計結果をお知らせいたします。



「守り」受け継ぐ意義

日本建築士会連合会 女性委員会 6代目委員長（2012-2015）

一般社団法人 神奈川県建築士会 永井 香織



女性委員会が設立30周年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。現在の社会状況は我々の生活のみならず仕事、世界を加速的に変化させています。このような背景の中、女性委員会に向けて思い出も含み、3つのこととお祝いの言葉としてお伝えさせていただきます。

1) **女性委員会の役割**；日本における女性の為の学習の場は、1941年設立の「財団法人 日本女子会館」に始まり、「公益財団法人 日本女子学習財団」として発展しています。2013年度には理事長に全国女性建築士連絡協議会（以下全建女と示す）に参加頂き、女性の社会における役割を考えさせられました。世界では1911年国際女性デーが設立され、3月8日をその日として、100年以上、世界中で国の状況に即した活動をしています。日本での建築分野では、先駆けとなる女性委員会が時代に合わせた活動の在り方を模索し、100周年に向けて、委員会の役割の形を変えながら大いに活用、活動してほしいと思います。

2) **成果の蓄積**；全建女は、情報交換の場です。この成果は、例えば全国の和室を纏める等、様々な活動成果を形にしており、今後の継続を期待しています。連合会女性委員会に参加し始めた時、全国の素材調査の発表を聞きました。材料施工の研究をしていることから、これらの発表に心弾んだことを覚えています。当時委員長に「本にしたい」と持ち掛け委員会で検討、出版の形になりました。また、全国の女性委員会の協力のもと実施した要介護高齢者住宅も全建女の成果です。声が届く委員会活動、共働の取組み、そして成果の蓄積は女性委員会の大きな財産であると信じています。

3) **守り繋ぐ意義**；全建女のテーマには、「つなぐ、共生、守る、環境、伝統」などの言葉が入っています。これは、「時代が変わっても技術が進歩しても私達には守るべきものがある」という大きなメッセージと考えています。それが暮らしであり、環境であり伝統です。委員長時代に実施した毎年の災害報告、放射線対策住宅や災害の募金活動、そして熊本震災直後の全建女の開催の可否等、波乱万丈な時期でしたが皆で心を合わせ貫けた強さに感謝と感銘しました。様々な挑戦を受入れて共に活動した皆さんとの思い出、今までの活動記録やこれからの挑戦が女性建築士を筆頭に暮らしを守る取組みの軌跡になることを祈念しています。

全国女性建築士連絡協議会第30回開催記念誌・寄稿文

全国の女性建築士の皆様との得難い交流を通して

日本建築士会連合会 女性委員会 7代目委員長 (2016-2019)

公益社団法人 愛知建築士会 小野 全子



このたびは、第30回全国女性建築士連絡協議会（福岡大会）を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。昨年は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ご案内の準備まで整えておりましたが、中止を余儀なくされ、昨年度の女性委員会の皆様、福岡県建築士会女性委員会の皆様には大変残念な気持ちでいっぱいであったことと思います。今年は、今までと違った新しい方法で開催されますとのこと、皆様のご尽力の賜物と思います。

私が委員長をさせて頂くにあたり、三井所清典会長初め、岡本森廣担当副会長、歴代の委員長の皆様に、多くのご指導をいただきましたことを心より感謝申し上げます。全国女性建築士連絡協議会は、東京と地方と交互に開催されてきました。初めて委員長になった年に早稲田大学名誉教授の中川武先生をお招きして、「和の空間を考える」ー居住空間にとって美とは何かーと題してご講演いただき、住宅史の流れから住まい方の作法における発見を様々な角度で教えて頂きました。この年より和の空間を体験して、その魅力を再認識できるような建築を紹介する「魅力ある和の空間ガイドブック（WEB版）」を制作することとしました。次の年の高知大会では「未来へつなぐ居住環境づくり」ー一周おくれで先頭に 伝統こそ最先端ーと題して、建築家としてご活躍の山本長水氏をお迎えして、ご講演いただきました。高知ならではの土佐漆喰の住宅をはじめ、日本の環境に相応しい住まいについてわかりやすく教えて頂きました。その翌年の東京大会では、「和の伝統技術の継承と創造ー新たなプロの育て方ー」と題して、左官業を営んでおられる原田宗亮氏をお迎えし、左官の啓蒙活動や左官業への女性の参加についてご講演いただきました。

基調講演と同時に、各建築士会の女性委員会の活動の報告と被災地報告をして頂いております。被災地報告では、東日本大震災をはじめ、多くの地域の被災状況と、女性建築士としてどのような活動を行ってきたのか貴重なお話をお伺いすることができました。また、毎年、8つのテーマで分科会を開催しました。防災、地域に特化した活動、環境問題、政策、子どもの問題、高齢者問題、既存の建物の活かし方など、様々な問題について意見交換を行ってまいりました。その内容は、今後の活動の糧となったことと思います。地方開催でのエクスカージョンも忘れられません。在任中の経験は得難い貴重な経験となりました。全国女性建築士連絡協議会にご参加の皆様にはこれからも多くのことを学んでいただき、また、友情を培っていただけましたらと心よりお祈り申し上げます。

全国女性建築士連絡協議会第30回開催記念誌・寄稿文
これからの全国女性建築士連絡協議会に向けて

日本建築士会連合会 女性委員会 8代目委員長（2020-）
一般社団法人 北海道建築士会 本間 恵美



令和3年度 全国女性建築士連絡協議会（以下全建女という）（福岡）は30回目の節目を迎えました。ここまで継続できたことは、日本建築士会連合会と各都道府県建築士会の皆様のご協力があったることと、心より御礼申し上げます。併せて、村上美奈子初代女性委員長をはじめ、歴代女性委員長が紡いできた賜物と感謝いたします。

30回の節目にあたって、福岡県建築士会よりポスターセッションのご提案があり、都道府県建築士会女性委員会（部会）の皆様にポスターを作成していただきました。作成していただいた皆様には、この場を借りてお礼申し上げます。新型コロナウイルス感染症の拡大により、残念ながら会場でのパネル展示が叶いませんでしたので冊子として配付しました。連合会女性委員会のホームページで、今回2020年と前回2010年のポスターセッションも合わせて見ていただくと、約30年の活動の歴史がわかりますので是非ご覧ください。

この新型コロナ過で、大きな変化が求められました。今までのように自由に移動して集うことができず、直接仲間と会えないジレンマがあります。しかし、育児や介護を抱えていたり職場の休みが取れず参加できなかった方が、オンラインにより参加しやすくなり、情報を受け取ってもらえるようになったことは、良かった点と捉えることができるでしょう。

女性委員会の活動の良いところは、変えないことと柔軟に変えるところのバランスが良いことです。変わらない部分とは、生活者の視点を忘れず、子供や高齢者、障がい者などの弱者に寄り添う心を大切にしていること。一方で、時代の変化や求められていることをキャッチして、新しいことを積極的に取り入れる柔軟な体制があることです。東日本大震災の後には、震災を忘れず寄り添うことが復興支援につながると、すぐに被災地報告を取り入れ、今も継続して行っています。

今回の新型コロナ過で、昨年は全建女の開催を延期し、女性委員長（部会長）会議も中止しました。昨年7月、小野全子前委員長から引き継ぎをしてすぐに新しい委員から、オンラインで開催しようという声があがり、女性委員長（部会長）会議は11月に開催いたしました。全建女福岡大会では、分科会を4つにして同時に配信することは挑戦でしたが、初めての全建女のオンライン配信を受け入れて、準備を重ねて実現してくださった福岡県建築士会の皆様には本当に感謝しています。30回の節目に、新しい形での全建女の開催は、これからの活動に向けた一歩になったと思います。